

## 北中の生徒が我が子

土日に釜戸町の文化祭がありました。北中からは、二日間で二十三名のボランティアと吹奏楽部が参加しました。さわやかな秋風の吹く穏やかな二日間に、北中の生徒の素晴らしさが至るところで発揮されていました。

受付や各ブースの担当、準備や後片付けに北中生は積極的に取り組みました。支給されたそろいのTシャツに身を包み、スタッフとしてきびきびと動く姿には頼もしさを感じました。公民館の関係者の皆さんも、北中生を重要な戦力として接してくださいました。吹奏楽部の演奏には、多くの方が足を運んでくださいました。三年越しの釜戸町での演奏です。吹奏楽を初めて目の当たりにする方たちも多くいらっしやいます。目だけでなく、耳からも文化をお届けできたこと、音楽で聴く人の笑顔を引き出せたことは、吹奏楽ならではのことで私はいくらうれしくなりました。

この二日間、私は北中生の活躍を確かめるために顔を出し、地元の方たちと北中生が交わる姿を見ました。その時に、過去とは違う感触があることに気付きました。言葉で表現するのは難しいのですが、あえて表現するなら、「北中生が地元の中学生になった」といったところででしょうか。

統合初年度は二十二のボランティア依頼に、延べ約四百人の生徒が参加しました。その時から北中生は、地域を大切に作る気もちを姿で表してきました。しかし、統合したばかりの時期は、やはり人々の意識の中に旧三校が強く焼き付いています。地区の人たちはどこかでその地区にあった旧中学校の生徒をイメージしていたように私には見えませんでした。（地域の方たち、ごめんなさい。私見です。）

それは仕方がないことです。長い間、旧瑞陵中、旧日吉中、旧釜戸中はその地区の中学校として人々に愛されてきましたからね。我が子がかわいいのは、だれもがもつ当然の感情です。

しかし、今回の釜戸町の文化祭では、そういう印象は全くありませんでした。「北中の生徒が我が子」という意識が生まれたと、私は感じました。吹奏楽部の演奏も、「地元の中学校の吹奏楽部」という意識で受け入れられたと思っています。

これは、昨年度と今年度、北中生から地域にアプローチした成果だと言えます。とりわけ、今年度のプロジェクト「f」は、「北中は地元の中学校」というイメージを地域の人たちに強く植え付けました。北中生がプレゼントしたものはささやかでも、人々の心には大きな喜びや感動、北中が地元の中学校だという強い印象を残したと言つてよいでしょう。

感染症が一日も早く完全終息して、北中生が広い校区で、多くの人たちと思いつき笑顔で関われるようになってほしいものです。そういう日がやがて来ることを心から願っています。